

発行日 昭和40年9月20日
発行 針葉樹会

針葉樹会報
復刊 第11号

連絡先 川崎市鹿島田890
および 原稿送付先 (株)日立製作所川崎工場勤労課
蛭川 隆夫

山行寸描
子持山 中川孫一

八月十四日(火)

伊香保に遊んだ人なら、向側へ北方に駱駝のコブのような双峰の聳えているのに気付くだろう。その右へ東のコブが、沼田八景の一つへ子持の夕照に称えられている子持山である。山名は、山麓の子持神社に由来するらしいが、一、三〇〇米の低山ながら、万葉の東歌にうたわれガウランドが登つたといふ名山であるだけに二つの特長がある。

一つは、一等三角点をもつ眺望の広さ、もう一つは、登り口に聳える屏風岩へ直立一〇〇メートル合目の大黒岩へ大黒天に似ている)の奇勝である。

尾瀬への玄関口沼田に程近いところにありながら、殆んど忍辱峯のようなこの山頂は、紙肩空罐、弁当袋が全く見当らず、まことに清々しい。

又登路と降路は、よくある〇〇神社の男坂、女坂のようだに難易、所要時間が極端に違う。登りは、杉の植林帯を潛る沢歩きに続く雜木林の尾根伝いで、が千ガチの岩石道が正味四時間半の茨川口バス停子持入口起算)も続くが、降りは、ローンスキイがでモソクナカマトの連續(三十分)の後、石ころの車道(一時間)で寺尾へ沼田口バス停)に着く。降りだといつても走つたわけではないので、夏山で、スキー登山ほど登高時間の大きい山は珍らしい。

土旺全休を利用したので、列車は、往復共にカラカラ。登山ブームにも、このようないく点多ることをお知らせしよ。



乗鞍駆け歩記

七月二十九日（金）

会社の家族旅行で、女房に黒四を見せた余勢を駆つて、島々からのバス登山。鶴ヶ池まで地図に足着かずで登つてしまふので、三千メートル峯には全く申訳ない。（立山も室堂までバスに乗なによは、物足りないような、全く満ち足りない気持である。

高山行のバスが出るまでの二時間フルに使つ

て中食と剣峯往復をやつたので、時計とニラメッコの駆け足登行、いさか邪道だが、許してもらいたい。頂上は、岐阜、長野の県境なので社殿が背中合わせになつてゐるのは面白い。岐阜側が神官も居て社殿も大きい。

夏履立ちこめて、御嶽も白山も、徳高も、笠も一切五里霧中は全く残念だつた。肩小屋下の大雪田は夏スキーの好ゲレンデ。肩から剣峯までのなだらかな山容は、冬はアイゼンの世界とは、うけとりにくい。

帝国陸軍が開発した高山バスルートは、近頃流行の〇〇スカイラインの走りだが、立派なものだ。それにしても、トラックでスイスイと運んだ苦の鑑入ビルが二〇〇円とは少しホリ過ぎやしないか。松本ルートニハ〇円、高山ルート三七〇円のバス代も、岐阜県へ濃飛バスはとりすぎる。

鶴ヶ池畔のバスターミナルは、芦湖のバスター・ミナルを連想させ、二七〇〇メートルの神聖ヘ？）な高さを冒頭するようで、何んとも欣然としたかつた。

黒四の観光客の中に、赤ちゃんを抱つこした若夫婦を見出したときは、冠大先輩に申訳ないような気持と、観電の観光商魂とがゴツチャになつてしまつた。

秘境や高峯は、万人に公開すると、神祕のヴァールがこれて、浅薄な観光地に堕落するよう

に思うのは、私だけであろうか。

五月二日（日）

乾徳山を知つたのは、河田横の「一日、二日山の旅」だったから、四十年も昔のことである。地図で見ても、墨金山尾根上の小突起で、二〇メートルは超えているが三角点もなく大した山でもなさそうに思つていた。しかし、登つてみて認識を新にした。泉、高原、岩峯の三拍子揃つた名山である。武田信玄の菩提所惠林寺の山号に因む山名も、政あるかなと思った。登山者は、初心者が多いが、むしろ初心者向推賞に住する山といつていいだろう。岩峯のスリルと、高原の寛ろぎとの取合せがよい。紅葉の頃はとぞ美事だろう。徳和の宿の中村屋では、手が足りないと、いうので、高校生のパーティが風呂を焚き、大先輩だというので、入れてくれた。山で会つた若人は皆エチケットがあつた。仙丈、尾瀬、針の木、鳥甲、やはり登山歴の功でであろうか。

わが水彩渡辺九郎
私の水絵は大正七年中学時代にはじまる。兄六郎は私の学んだ東京高師附中の先輩で、高等学校時代既に大下藤次郎に就いて水彩画を修め、その頃既に素人ばなれがしていたらしい。

私の中学時代は板倉賛治先生、兄のときは真野紀太郎先生であった。板倉先生は二学期が始まるときまつて夏休み中の水彩スケッチを団画教室に持つて来られた。それは房総の御宿や仁石エ門島あたりを画いたワットマン四切程度のが足りないと、いうので、高校生のパーティが風呂を焚き、大先輩だというので、入れてくれた。山で会つた若人は皆エチケットがあつた。仙丈、尾瀬、針の木、鳥甲、やはり登山歴の功でであろうか。

その頃の絵は素描も着彩もたどたどしく、兄の画いてくれた遠景に沼を置いた百姓家の一枚を見ていると、兄の筆捌きに目を見張つている。附中制服の幼ない自分の姿が目に浮んで来る。その頃紙は細目ワットマンの水張りアロックス

絵具はニユートンかフルランのチユーブ、みんな兄が勧えてくれた、兄はいつもやさしく丁寧に教えてくれた、やがて私は東京商大に進んだ。

一ヶ橋の六年間を私は山とスキーで暮した。私の水絵には山のスケッチが多くなった。北アルプス三俣蓮華岳の一枚が残っているが中学時代と余り変りがない。部報や「針葉樹」に山の挿絵も画いたが、よき山友が沢山出来て、とても水絵の勉強どころでなかつたらしい。そして昭和三年卒業、三菱銀行に入社した。

本店で二ヶ月の講習を終えた私は中之島支店配属となり、六月はじめ末だ見ぬ大阪に単身赴任した。その夜泊ったのは既に野村証券本店に勤務していたよき山友五十歳数馬の下宿先であった。

団らすも中之島支店長は一ヶ橋の先輩上村琢磨氏で三宅克己門下の吉田喜造画伯に就いて行員一同パステル画を習っていた。

しばらく遠去かつていた水絵への情熱が私の胸に勃然と湧き起つた。堂島川や中の島、東西の横堀や永代沢、江戸堀や京町堀、水の都大阪

の珍らしさに私は我を忘れてスケッチした。

至る處が堀であつた。如何にも商都らしく白壁の倉の並んでいる處が多かつた。紺屋が高いう物干場の下の堀に舟を浮べて、色とりどりの布を洗つてゐる風景や、倉の横手の水門から和服姿の番頭が小舟で出て来る景色には、画集に見る石井柏亭の「並び倉」を思い出したりした。

その頃私は二人の兄健児、六郎、番頭池田武治郎の三人と町越会というものを造り、毎月水絵を交換していた。又東京にあつた兄産三人は私の休暇に合わせて町へで写生旅行をしていた。

東は伊香保・川原湯、猿ヶ京、伊豆、箱根、蓼科、西は奈良、大和、鳥羽、南紀、それは何よりも楽しいスケッチ行の連続だった。前の晩水張りしたマットマンのピンと張られた画板、宿へ帰つての夜はその一枚一枚が互に遠慮なく批判された。夜はみんなひと角の大家であつた。

既に日本水彩画会会員だった兄六郎は水野以文、望月省三、早川国彦、相田直彦あたりと同格で、赤城泰舒、後藤工志、石川欽一郎、河合新蔵、三宅克己、南薰造、中沢弘光、小杉末醒、

石井柏亭などとも親交があり、その水彩技法は見事であつた。

私の大阪では上村支店長の転任と同時にパステル会は解消した。会員でなかつた私は吉田画伯を訪門、更めてその弟子になつた。

吉田画伯の教え方は御世辞たらたらの今迄とは打つて変つて厳格で、毎日曜芦屋のアトリエでは数人の門下と共に石晉と裸婦のデッサンが続けられ、水彩についても兄とは又違つた技法が授けられた。それは隅々まで隙間なく綺麗に仕上げる兄に対し、正念場に思い切り力を入れる如何にも専門家らしい水絵であつた。

その間にも年に何回かの東京の兄達との写生の旅は続けられていたので、旅行の度に户外で又宿で私の進境に驚いている兄達が私にはおかしくもあり又愉快だつた。

休日といへば奈良、大和の寺寺を書き続けた。喜光寺の金堂、新薬師寺の門、白毫寺の坂、円照寺の庭、中沢弘光のスケッチに教えられ唐拓提寺の金堂の前や、薬師寺の塔の下に幾度か画架を据えた私だつた。若葉の奈良公園では加藤

静児に習つた。奥瀬英三も知つた。素描の好きは私の作品にはコンテ着彩が目立つて多くなつて來た。

M.コットン紙やアルシェも試み、絵具も店の近くの吉村の和製のホルバインを盛んに用いた。

昭和十一年秋、大阪足掛十年で東京へ帰つて連れて行つた。有名な石井柏亭に会うのは始めてであつた。その頃としては稍得意だつた白樺の林の上に蓼科山の見えるワットマン四切を手にして長い間見て居られた柏亭先生は、素描も確かに着彩も正しいが白樺の幹の生のホワイトは他の色が退色すると飛び出して来るから注意する様にと言られた。一枚のスケッチにも先の事迹考える柏亭に私は巨匠という印象を受けた。

四趣会に柏亭先生を加えて銀座伊東屋にて日本名勝スケッチ展を開いたのはその後であつた。兄達が柏亭先生の半額、私は兄達の又半額と定められ、それは何年かのおびただしい点数であつたが私の水絵が一点も余さず売れたの

には驚いた。

兄ヒ上州老神で画いた梨の花に雨の降つてい
る湯の宿の半切「春雨」が二十九回の日本水彩
展に、湯松曾で画いた奥利根溪流の半切「鶴声」
が三十回の日本水彩展に続けて入選した。石井
柏亭門下の双台社第一回展の「春の川辺」には
柏亭先生の好感を持たれた批評がなされた。

大東亜戦争が始まつた。兄一族は松島の奥に
疎開し、私は空襲も終戦も三菱銀行横浜支店で
迎えた。二十三年三菱銀行退職後は生活環境教
変の上病を得て、三十一年大船から鎌倉に居を
移した。恰も秋で鎌倉では文化祭が行われ市展
に水絵の数枚を出したのが市観光課に認められ、
好評を得、翌三十六年の第二回は更に成功を納
めた。三十八年には北鎌倉円覚寺大光明宝殿落
慶記念に同寺院の水彩絵葉書を刊行、優れを觀
光絵葉書と大方の喜ばれる運となつた。

けれども個展も絵葉書も見て貰い度かつた吉
田喜造、加藤静児の両画伯、恩師石井柏亭、兄
健児、六郎の二人と池田武治郎は何れも既ヒ亡

かつた。

思えば水絵という種子がこの日本の土に貢ら
されて既に一世紀近くを経過した、そして芽を
出し花も咲いて、それは一通りの花盛りすら経
験した。今迄の水絵は確かに一應は美しかつた
じ、又誰にも愛される判り易い樂しさも持つて
いた。

然し絵画として一番大切なものを置き忘れて
いたことがなかつたか、仮借する陋なぎ芸術批
判の酷しい嵐の中に敢然と立てるだけの一連の
こと深く美しさが果してあつたであらうか。

水絵を心から愛する一人の画学生として、私は
は今後の水絵が水彩画という条件つきでなしに、
眞の絵画として格の高い美しさと強さを持つ様
になる事を希望して止まない。

良い芸術はその芸術を生んだ民族のよい性質
を持つてゐる。イタリーでもドイツでもフランス
スでもその芸術はそれぞれの良さを世界に示し
てゐる。

日本の墨絵は支那から來たが、日本人はその
墨絵を生かして自分の國日本の墨絵を立派に造

りあげた。

日本の水絵は明治の初期イギリスから来たが、その末期には早くも優れた水絵が日本人の手によつて見事に造り出されている。

浅井忠はフランスで勉強した人であるが、素直に飾り気なく写生したその風景画の中に、浅井忠という日本人の感情が見事に美しく流れている。中沢弘光は日本的な意味の印象主義を完成した水絵の名手であり、石井柏亭ほど水絵を理解し、これほど日本の風景を感じさせる水絵を画いた人はない。

反動的に工夫を凝らした其後の連中の水絵よりも、こうした名手産の水絵の方が日本人の水絵らしいのは不思議の様に思われるけれども、それは日本人が日本人の生活と現実の中から、正しい精神と思想とを見出す事が何よりも大切であるという事を物語つてゐる。

そして美術に対する日本人の優れた天性は日本水絵をやがては必ず世界一流のものにするであろうことを、私は信じて疑わない。

白又山八口宿ハヤシロより

石 弘 光

今夏の現役の合宿は、例年とは異なつて、えらく変則的におこなわれた。四年生の就職のためとやらで、縦走は二、三年中心で七月におこない、定着合宿及び一年主体の縦走は、八月も後半に突入しようとする頃からはじめられた。以下、老骨に鞭打つて数日間、参加した定着合宿の様子である。

○月○日

出発の夜である。シーズンも盛りを過ぎているから、列車もすいていようと発車時間の三十分ほど前に、新宿へ行く。例によつて、糞汚はい連中が、五、六人わいわいしてゐる。なんでも、富士山清掃と一緒に参加した東女ヒメコの山岳部の一一行が見送りに来てくれて、いましがた帰つたばかりだという。皆、でれえっとし、興奮さめやらぬ顔である。道理で、余り見はれぬ

高級な差入れば、ゴロゴロしている。バイカン、ぶどう酒等、いずれも重さにかけては一・ニをあらそく品物ばかりである。これが先輩、即ち小生の荷物とあいなつた。こんな重いものばかり差入れるとは、全く氣のきかぬ連中だ」と、つりぐちも言いたくなつた。

○月○日

列車は、えらく空いており、一つのボックスを二人で占領し、ゆうゆう寝ていく。塩山を過ぎた頃、一度目が覚めたが、次にねむい目をこすりながら、窓から外をのぞいたところ、もう松本市内であつた。

上高地行のバスは、島島からしかでていなし。

一度、表の広場にでたのに、もう一度、島島からしかでていなし。一度、表の広場にでたのに、もう一度、島島線のホームまで逆戻りである。三日前から、電車が二〇円、バスは、実に島島——上高地間で、一〇〇円の値上げになつてゐる。料金改正レヒは、何だ。貼り出してある告示を見て、一同、しばし、わいわいがやがや

である。松本電鉄の独占事業の弊害か。その上、荷物代が、二〇〇円せ、上高地まで五一〇円かかることになつた。行きにくくなつたね、上高地は！

バス道路が、だいぶ変つてゐるのには驚いた。トンネルは、沢渡の先に三つあるだけであつたのが、沢渡の前で、すでに二つばかり、中に電気のついた近代的なやつを通過するようになつていて。これも一〇〇円値上げのあらわれか。いたる所、工事中で梓川の対岸に新しい道路を建設中でもある。いずれハイウェーが、生れるのではないかとも思った。

× × × × ×

上高地、思つたより混雑していなし。でも、スカート、ハイヒールの都会姿のおねえちゃん連が、目につくのには変りない。上空は、一面に厚い雲におおわれ、いまにもポツリときそうである。風も、心なしか冷たい。秋も間近い上高地である。

まずは、ボツカ日和、先発の連中が荷を預け

た河童橋の先の厚生省の事務所で、遅い朝食をとる。残された荷の中には大きな米袋もあり、再び荷分けをする。その米袋を、十五キロヒにらんで、頑張って小生が背負うことにする。現在、もつてているのが、私物と例の差入れなどで、十五リニ。キロ・合せて三〇キロ程度なら、洞沢までなら大丈夫だろうと、腹の中ですばやく計算したわけである。ところが、どうして、重いの重くないのと、背負子にくくりつけた荷は、肩や腰にくいこみ、新兵時代のボツ力を思わせる苦しみである。人通りの多い明神までの道で、一行から完全においていかれ、恥も外聞もなく、ひいひい言つてしまつた。それでも、上高地一、明神間を、五〇分で通過、吉城屋の前で待つていてくれた連中に追いついた時には、汗びっしり、現役諸君のいたわりとなぐさめの言葉をうける破目におちいった。そこで、この難物の米袋を、四年の原が代ってくれることにはつた。元氣者の彼が、徳沢に行くまでに、この荷物のためにかなりしごかれたのだから、よほどの難物であった。結局、徳沢に置いていくことにし

たが、後で先発の連中に聞くヒ・ミ。キロ近くは、あつたらしい。四〇キロ程度の荷に、この米袋をつけた原のボツカ力には、たとえ、明神一徳沢間でも、特筆に価しよう。

横尾で、昼食を兼ね大休止、これからが本番だといふ。一年生は、驚かされている。一年生といえば、わずかに二名、縦走に二名参加している。そらだが、計四名とは淋しい限りである。延長と長蛇の列を作つて入山した我の時代のことを考えると、今夏の合宿の本隊は、わずか七名、先発四名が合流しても十一名、更に縦走隊五名が、洞沢に到着しても、十六名にしかならない。テントが足りなくて、半分、外にはみだして寝た時代とは雲泥の差である。

横尾を少しでた所で、先発隊の出迎えをうける。荷物がだいぶ減り、小生なんぞ私物だけにうける破目におちいった。そこで、この難物の米袋を、四年の原が代ってくれることにはつた。元氣者の彼が、徳沢に行くまでに、この荷物のためにかなりしごかれたのだから、よほどの難物であった。結局、徳沢に置いていくことにし

たい雨である。こんなところに、夏の終りを思
わされた。

× × × × ×

一人おくれた一年生について、洞沢のテント
場に着いたのは、五時もだいぶ過ぎた頃であつ
た。テントの数も、二〇余り。冷たい雨上りの
風が吹きすぎ、夕闇がせまっていた。寒い！
ありつけの衣服を身につけ、シラフにもぐり
こんだが、それでも寒い。三〇度をこす下界の
暑さに馴れていた身体には、ひとしお、寒さが
身にしみるのもしれない。

遅い夕食をとる頃、天候はすっかり回復し、
満天に星が散らばつたすばらしい夜になつた。
天の川がくつきり浮び上り、星がこんなにもあ
つたかと再認識するような夜であつた。夏山と
みて、シラフ・カバーしか持つてこなかつた連
中には、寒すぎる夜のようであつた。

○月○日
北尾根の上に、オリオンの三ヶ星がくつきり

見える未明、我我の一日が始まる。食当三時起
床、四時朝食、五時には出発である。今日は、
四名徳沢まで逆ボツカ、残り全員は、足馴らし
のため、前穂北尾根ということになった。小生
北尾根隊に入れてもらう。

五六のコルまでが苦しい。ゴロゴロした岩
の間を飛び越え、朝露の道をふみしめて、朝の
光で一杯のコルに到達した。すばらしい天氣で
ある。雲一つない青一色、甜碧の空である。し
ばらく岩に触れなかつた体は、五峯の登りでも
こわいような気になる。五峯の上で、のんびり
景色を眺めているうちに、匣中は、四峯の壁を
見に行く。北穂から槍、常念蝶、富士山までが
雲の上に浮んでいた。すげえ！ 山にきてしみ
じみよかつたなあと思ふ瞬間であつた。五峯を
下り、四峯へ、前穂東壁のロフエース、石岩稜
にとりついている他のパー・ティの姿がよく見え
る。いずれも難没しているようである。

三峯の登りは、いつもながらいやな所である。
ここで、ザイルの練習も兼ね、ニパー・ティ作り、
チムニーを登ることにする。ザイルがないヒー

寸こわいし、つけると面倒だしといったところである。前穂のテッペンで、一回目の食事をとりながら、のんびり四方を見まわす。五峯の上より、一段と眺めがよい。長い長い西穂の稜線が印象的であつた。昼食は、ビスケット十六枚、チーズ少々、アメニケ、これがなかなかいける。ジエースもうまい。万事良好である。

良好でないのが、吊尾根から、奥穂への登りである。遅れても言いわけがたつようなど、のんびり景色を楽しみながら行くと称して、内では精一杯頑張つたが、奥穂の頂上に着いた時には、本当にはるかに遅れてしまつた。

X X X X X

ガイテンの下りのことである。直頃は、やや余裕が出来たので、下手くそながら、スケッチをすることにしている。皆、先へ行つてもらつて、前穂の北尾根の全貌を、道のかたわらで、エンピツなめなめかいていた時のことである。山へきて、絵をかくなんてしてきだわ。若い女性の声、おや芸術を解すると、思わず頬

がほころびて、後を振りむく。つづいて一寸、こちらをのぞいた連れの男の声、「あれはね、スケッチでなくルート図なんだよ。」夢がむざんにくだかれた瞬間でした。

X X X X X

今晩のおかずは、ゴタ煮だそらだ。えらく早い、五時一寸過ぎた頃である。人数は少いし、ラジウスでやるので、一時間少々で、豪華版の献立が完成する。直頃のメシをよそる順番は昔と逆で、年長者ほど後まわしにされる。首つけおわつて、いただきます。をする前に、さめてはいけないという配慮からである。俺が新兵の時は、先輩やりーダーから、よそつともんぢがヒ、あたたかいメシと汁の碗をかかえて、感無量になる。夏山で朝夕、食後に紅茶がつくなんて、ヤロー会時代から考えると夢のよくな訪である。その上、ビタミン剤まで配給になる。これでバテたら、申しわけなし。

○月○日

今日は、一人でキンデンと決めこむ。リーダーから、第二尾根でもと言われたが、南稜を登つて、沢のガレ場を下つてと考えたら、とたんにいやになった。そこで、涸沢付立を一日うろつきまわることにする。いい御身分です。

皆が滝谷へ行つた後、もうひとねいりして、テントの外でトカゲときめこむ。今日も、いい天氣である。ねころがると、目にしみいるような青空が一杯にひらける。ありつけの週刊誌をかたわらに置き、センベイをボリボリやりながら読みふける。山の一日は長い、まだ八時である。

ふと、こんな話声がする。

「あれが前穂で、こちらが奥穂だな。なんとはなしに目がいく。驚いた、語り手の指は、前穂の時、屏風の頭にいき、奥穂の時、前穂にいつている。思わず、その人物を凝視してしまつた。なかなか立派なスタイルである。新品のニッカーストッキング、ナーゲルをはいて、柄子のシャツを着ている。四峯の正面を

登つてもおかしくない風貌である。そこで、薄汚れた我が身をかえりみて、こう結論した。ナリのいい奴ほど、てえしにことはねえ」と。

× × × × ×

おかしな奴の見事もあきたので、ブラブラ南稜を登ることにする。光線がかなり強いが、風がサラサラ木の葉をゆすつて吹きぬけると、なんとなく夏の終りをつげているような気になる。ミヤマリンドウをはじめ、道ばたに一杯、花が咲いている。時間はずれのせいか、人にもめつたに会わず、文字通りつたつた一人の山廬である。南稜テラスの少し前で、ねころがる。青い空に黒い前穂の岩稜、その上に筆でなすつたよ

うな白い雲、涸沢槍あたりで落石の音が、静寂を破る。山のふところに抱れ、いつしか眠つていた。



完

カラコルム遠征準備 経過報告

かねてより計画中であったカラコルム遠征隊派遣の件は、去る二月二十五日の針葉樹会総会で正式に決定され、その後、今日まで山本隊長を中心として鋭意準備が進められてきました。

一方、その間に、皆様すでに御承知のように、パキスタン政府が全面的に入山禁止を通告してくれるといった事態になり、登山許可の面でその実現が危ぶまれるという状況になりました。

しかし、去る六月十五日の協時総会で派遣を決定した甘利隊長以下三名の先遣隊が七月二十

一日に羽田を発ち、パキスタンのカラチにあつて歩外の実をあげ、また、それと呼応するようにな、七月の末になつて「目下登山許可を考慮中」という在日パキスタン大使館の公式文書が届きました。

複雑な国際情勢の下で、カシミール紛争は一段と激しさを加え、われわれの遠征に対するパ

ーミッションの見通しも予断を許しません。しかし、ともかく、現在、幾度転を経ながらも、われわれのカラコルム遠征計画は、実現に向つて、着実な一步を踏み出しました。

ここで、六月十五日に開かれた総会以降の経過を報告致します。

一、先遣隊への資金援助

中川孫一、吉沢一郎、増山清太郎、望月産夫、高崎治郎の五氏が発起人となつて、資金カンパが行われた（七月六日）。

八月十五日までに、五六名の方から合計十一万九千円の御援助を戴いた。感謝致します。

二、七月二十一日 先遣隊出発

甘利仁朗、丸子博之、佐藤文敏の三隊員は、七月二十一日午後五時、羽田発日航機で、元氣にカラチに向け出發した。

三、七月二十六日 先遣隊からの第一報到着へ

七月二十四日付

〇五月十八日付在日パキスタン大使館からのリ

ジエクション・レターは、カラチに来ている。いろ確認してみると、急急的なもので、決定的はない意味をもたないことがわかった。外務、国防両省の担当大佐が全く無視するような発言さえしている。

② 商社の駐在員等カラチの在留邦人の方々、日本大使館の担当書記官等が全面的に協力してくれており、政府及びカシミール州の要人と

の交渉の鍵もつかむことができた。

③ 国情からみて、熱意次第では、十分許可をとらえる条件があるし、そのような先例もある。以上から、かなり明るい見通しが出てきていることを報告してきた。

四、七月三十日 在日パキスタン大使館より「

許可を考慮中」との正式文書を受け取る。

要旨は、一五月十八日付の文書で、直つて通知するまで入山を許可できない旨連絡したが、以下、貴方のアフリケーションに対して、登山許可を考慮中である。

ついては、ポーターに事故があつた場合の補償料を値上げしたので、この規定に基いた

新しいデクラレーションを、すぐに提出してほしい」というもの。ある意味では、先遣隊の報告を裏付けるもので、再び事態は新しい局面を迎えることになつた。

新しいデクラレーションを、すぐに提出してほしい」というもの。

新しいデクラレーションを提出

六、八月十八日 評議員会

（出席者）中川孫一、吉沢一郎、増山清太郎、

望月達夫、中村正司、高崎治郎、大賀二郎、
ヘ議題▽

新しい局面を迎える厳しい経済情勢の下で、遠征計画を今後どのように進めるか。

ヘ議事▽

① 四十年下期の景気も決して好ましくない。従つて、六千七百万円の募金は極めて難かしいと判断される。

② しかし、来年度は募金の上の競争相手が少い。

③ アンデス遠征の際は、大口の募金を中心には、法人関係では約百社の御協力のみで目標を

達成することが出来た。しかし、今回は前回の経験を土台として、より組織的に、しかも丹念に、広く募金を行わざるをえない。その体勢が整えば、六、七百万円の募金も不可能なことはない。

④まず、針葉樹会内部の盛り上りが大切な条件になる。隊員に選ばれる人も、それを支える針葉樹会員も、出来るだけの資金を寄せ合ひ、それでもどうしてもまかなえないとから募金をお願いするという雰囲気と姿勢をつくることが必要である。

⑤九十周年記念事業として、増田享長も大きな期待を寄せており、チャンスは数多くあるものではないことを考へ、厳しい経済情勢下とはいえ、遠征隊派遣を再確認する。⑥十月初旬に臨時総会を開催し、その席上、望月資金委員長より、募金の具体的な方法を提案し、十分に審議してもらうこととする。

会に提出

遠征に要する一万五千ドルの外貨を、日本山

岳会に割当てられているスポーツ外貨のうちから割当ててもらうよう、計画書三部を添えて申請した。

(中島)

甘利氏よりの手紙

カブールで出す筈であつた前便を出しそこなつてBC立持つて来てしまつたので多分この手紙と一緒に着く事になるでしょう。

8/12 カブール発 九・〇〇

Chamjin 着 五・〇〇

馬一頭、ロバ七頭でキマラバン開始

8/13 Chumjin 発 ハ・三〇

テント場着 五・三〇

テント場発 ハ・一五

8/14 Gashen 着 三・〇〇

Gashen 発 一〇・四五ヘミルサミール谷

八月二十五日、外貨割当申請書を日本山岳

会に提出

テント場着 ニ・三〇

テント場発 九・一五

8/17

偵察

かくて今日は八月十八日、第一回荷上開始です。BCに入つて驚いた事にはここにイギリスのPenecostel大学遠征隊十二人がねばつ正在のに出合いました。

彼らはカラコルムと予定していた延、出発七日前に許可取消通知が来て、急拠目標をこのミルサミールに変更したとの事です。BCに入つてすでに五週間、八月十六日最後のアタックを試みて失敗、遂に昨日八月十七日打切りを決意したそうです。彼らは学術調査が主旨で登攀隊は六人だけだそうですが、それにしても彼らが六週間かかるて失敗した山ですから相当なものである事がわかるでしょう。

概略説明しますと、BCは四一五。m。北稜と西稜は物凄い岩のバットレス、人工登攀の領域で先ず我らの武器では問題にはりません。東稜は登られているルートらしいが、それは北稜と東稜の間の全く違う谷から入るもので、ここからでは三〇.〇mに及ぶ氷壁ヒヤマツアを越

えねばならず、イギリス隊も最初試みたそうですがあまりに危険で引返しにそうです。残るは南西稜です。イギリス隊は南西稜のコルにC Iへ五〇〇.〇mを出し攻撃したが、そこからのミ〇〇.〇mに登降十三時間を要し登頂をあきらめにそうです。

そこで我找としてはイギリス隊のC I位置及びそのやや下にC IIを出しへ四八〇.〇五〇〇m)、出来れば彼らの到達したクロアーレ上の南稜上と思わしき地氷にC IIを出しへ五三〇.〇m)、そこから頂上を目指そうと思います。この南西稜ルートは一九五九年ドイツのE. Böller隊がこのルートから初登頂し、頂上でビザニアク東稜を下つた記録が唯一のようです。ミルサミール登頂はイギリス隊の資料によればその一回だけとの事ですがはつきりしません。へ吉沢さん聞いて下さい。昨年ドイツ隊、本年ドイツ隊とイギリス隊がともにこの谷に入り、いづれも失敗しています。このルートからは第二登にことによるミルサミールそのものの第二登になるのかも知れません。一見して物すごい岩峰

です。Kスを小さくしたよラな形で、どのルートからでも一〇〇〇m以上の岩稜及び岩壁がそり立っています。予想外の素晴らしい山容に全員大いに張切っています。ビザーアークは必至となるでしようが、天候がとても悪く、昨日はミゾレ、今日は頂上が見えていますが岩場はうつすらと新雪をかぶってすごく悪そうです。とにかく面白い事になりそうです。ロックハーケン、ファイスクスザイルが足りなくなりそうです。イギリス隊は五週間かけて失敗しましたが、我々はBCから最大十日間で何とかしてみるつもり。

8/18

荷上、デボヘ人夫四人を僕う。この日のみ)

C I 建設

逆ボツカ

偵察

8/24

偵察

8/25

偵察

8/26

偵察

8/27

偵察

8/28

偵察

8/29

偵察

8/30

偵察

8/31

偵察

9/1

偵察

9/2

偵察

9/3

偵察

9/4

偵察

9/5

偵察

9/6

偵察

9/7

偵察

9/8

偵察

9/9

偵察

9/10

偵察

9/11

偵察

9/12

偵察

9/13

偵察

9/14

偵察

9/15

偵察

9/16

偵察

9/17

偵察

9/18

偵察

9/19

偵察

9/20

偵察

9/21

偵察

9/22

偵察

9/23

偵察

9/24

偵察

9/25

偵察

8/26 C II 徹収
8/27 C I 徹収 BC 扱着
8/28 洪して我我で登れないルートではなさそうですが、全力を出し切る要のあるルートでしょう。要は天候次第です。

さて以上でミルサミールを終つたらミルサミール北部又は南部のコルを越えてランガル谷に入り、それをつめてランガルバス周辺の未登の五六〇〇〇m峰をぐります。しかし何分にも日数がないのでそちらの方はミルサミールに要する日数次第という事になります。

人夫が下から上って来ました。それでは元気にはやつて来ます。一度宛下痢をやりましたが今は回復、今日から行動開始です。BCからはいそがしくて手紙が出せません。又家庭にも話してやつて下さい。佐藤は四七〇〇迄一気に登つたが高度の影響全くなく、日本の山と同じだそうです。丸子は一日三回キジをちゃんと打ち、キジをするにも人前でしゃあしゃあとやつています。小生は思いの外歩けそうで、BCで遊んでいようかと思つていにが少くともC II迄は行

けそうです。少しうつ昔の調子を取戻しつつあります。

今日三井物産力ラケの関口氏が下山するので
彼にこの手紙を託します。では又。

3/18

ミルサミール B.C. にて。 甘利

丸子 仁朗

佐藤 博之
之敏

御承知の通り、甘利氏他二名は来春
の遠征隊のために現地接歩に当つて
おりましたが、一応その任を終えて
八月中旬ヒンズークシユに向いました。
事務局長中島氏宛に同氏より便
りが届きましたので、掲載させて戴
いたものです。

松田屋

連絡ノートより

山の都松本市に松田屋(松田屋)なる連絡所が置かれてから二年近くになります(会報ハ号参照)。合宿用の荷物の買出し等で大いに利用しているうち、連絡用に設けたノートも、はや二冊目となりました。ひもビクラちに、山から降りてきたばかりの学生の新鮮な感慨が傳わってきて楽しいものですが、その中にまじつて会員も時々出していますので、紹介します。

三月二十九日

上高地の木テル小屋で学生諸君ヒ会ラとは偶然とは言え全く驚いた。夜遅く着いてカレーラーメンを御馳走して貰い、道具も借りたりしたが全く嬉しかった。君らが下山した翌日西穂のラツセルに悩まれ、西穂小屋迄六時間近くか

かり、とうとう頂上をふめなかつた。もう登車時間となつた。

高崎

五月五日
サラリーマンの悲しさで、この連休が楽しみで、毎日馬車馬の様に働いているのです。はじめから物悲しいことを書いて申訳ない。

この連休も在京OBのACTIVE MEMBERSに声をかけたがうまくいかないし、時も時、小学生の「友人」の追悼登山をやることになり、中止までいって來た訳。

5/5と雨で、奥又の出合でアラアラしてしまつた。ほんせ、御遺族の方がおられるので、馬鹿様に行動がはからなかつたが、5/6は小生ひとりで（代理ですな）横尾尾根—南岳—中岳—大嶮—槍—出合ですつとばして、無事追悼を済ませました。所要時間一一三〇分、いい年をしてアゴを出しながら歩く姿は我ながら淋しいものでした。

その後は、おつきあいをして、下りて來た次第。

ノートを埋める現役諸兄の元気な活躍振りは大変嬉しい。

名古屋に来られる折には立ち寄られたし、駅前毎日ビル五階日本板硝子TEL(五六)一四二一又来て書きます。

大橋

七ヶ月振りで、*May morning* に現われた。新雪に粧をこらしに穂高の稜線を上高地から仰いだ時には、懐しい古巣に帰ってきたという感じがグツと胸に来た。学生時代に足しげく……と

いう程でもないが……通つた山だものは。

土曜休日と休暇を一日庾つて、一〇日朝富山を出て、高山経由岳沢Hütteに入つた。一一日は折りから日本中をポツカリ覆つた移動高をつかまえて、秋晴れの中を前ホー奥ホーザイデン—涸沢Hütte、そして本日下山、という訳だ。出発する数日前の悪天の中で遭難者を続出させた山山であつたが、全く嘘の様に晴れあがつてしまい、奇妙な感じであつた。たも女性一名、男性一名へ僕の他に、連れであつたから、

晴れなかつたら、毎天泊りでそのままブソンクサ
言いながら下山したかもわからぬけれど。毎天
に下つた時にやはり数日前四尾根で凍死したと
いラニ名を下ろして、いた東工大のpartにスレ
違つた。四尾根という名前は、名和の例のpart
事故を再びマザマザと思い起させ、彼の場合は
幸いに一命を取りとめ、現在は相当回復してい
るという様な一部の報告であつたが……。然し
東大partの例の大量の遭難を出してまだ、山
に登る者の頭から忘れ去られていなかつてと思ふ)

時に同じ様なへ勿論気象条件その他に違ひはある
が、遭難事故を出してしまふ。」他山の石シ
という言葉はもつと深く考えなければならない。
さて、近況を書こう。

先月へ九月二二三日、二四日に恵那側から即
ち槍平から槍へ登ろうと出掛けたが、雨女を連
れていた為台風を呼び、槍平迄で下山した。然

しほだ一度も見た事のないへ一年の時笠へ行つ
た時はガスついて何も見えなかつた。穂高の
裏を見たといラ効用はあつた。竜谷の出合から
上部を仰いだ時がスの中から時々見え隠れする

上部のルンゼ、岩壁は確かに登攀意欲をソソル
ものがあつた。来年の秋には誰か誘えれば出掛け
ようと思う。

現役諸君の非常にAction的な記録を読ませて
頂いて、一橋山岳部ここに在りという感を深く
した。佐藤へえーを始め、岩に、雪に、積極的に
取り組んで行く諸君の健斗を祈る。

竹中

三月二四日

ブルーバードと共に信州のスキーを兼しむ。
梅池—天狗原—乗鞍、八方ヒハシゴスキーリーは大
変面白かつた。

日本庄命の細野山寮は一泊ニ食五〇〇円！

誰か日本庄命に入社すべきと思う。

甘利

スキーもラまぐなると、山などおかしくつて
しまう。

登る長シネエ

倉知